

5 イチジクの凍害の発生実態と防止対策

1 発生実態

幼木が凍害を受けた場合は枯死することがあるが、成木では枯死に至ることはまれである。成木の凍害は当初は外見からわかりにくく、発芽も正常に行われ、被害に気付かないことも多い。しかし、6月頃には主として主枝の上面や主幹の陽光面の樹皮に局部的な褐変やひび割れ症状が認められるようになる。このような症状はその後、次第に明瞭になり、健全部とははっきり区別できるようになる。これをそのまま保護せずに放置すると再び凍害を受け易く、前年までの傷が治癒しないまま、被害部がさらに広がり、ついには樹皮がはげ落ち、材部が露出する。続いて材部が腐朽し始め、樹勢の低下とともに物理的にも弱くなり、経済樹齢の短縮につながる。

2 防止対策（アルミ蒸着フィルム被覆法）

従来、内陸部の産地では、樹全体を稲わらで厚く巻いて保護する方法で効果をあげているが、労力を多く要するのと稲わらの確保が困難になってきているので、アルミ蒸着フィルムによる被覆法を開発した（図1、2）。これによって労力を稲わら巻きの約4分の1以下にできる。また、フィルム（例：日立AIC製ネオポリシャインクロスT）は5年以上

繰り返し使用が可能なので、コスト面からも実用性が高い。

- (1) 一文字整枝等、主枝が水平に近い整枝法のイチジクを対象とする。
- (2) 被覆前に結果母枝の剪定を行う。この際、結果母枝の残す芽の上部の節間部をフィルムを固定しやすいようにやや長めに残す。
- (3) 120cm幅のアルミ蒸着フィルムで上から主枝を覆い、下面は開放しておく。アルミ蒸着フィルムで被覆する際、フィルムと主枝上面の間に空間をつくり、直接、接触しないように注意する。このため、あらかじめ主枝の上に10~20cm位離して主枝に平行にマイカ線などを張っておくのもよい。フィルムは自転車のタイヤチューブを輪切り（3~5mm幅）にしたゴム輪で結果母枝の先端に固定する方法が能率的である。結果母枝の剪定切り口とフィルムの間に短冊状に切った新聞紙2~3枚を挟んでフィルムの上からゴム輪をかける。新聞紙は枝の切り口から溢出する液の乾燥を容易にするためである。主幹部はフィルムを全周に巻く。
- (4) フィルムを展張しやすいように支柱等を配置しておく、さらに能率的に被覆できる。
- (5) 被覆期間は12月下旬から4月上旬の発芽直前までの間とする。

注意事項

幼木は成木よりも耐凍性が劣り、厳寒期でも-6℃程度とされているので、1~2年生樹については稲わらを厚めに巻くか、稲わらとアルミ蒸着フィルムを併用するなどの対策が必要である。

堀本 宗清（中央農技・園芸部）

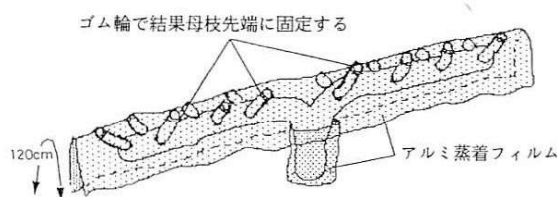


図1 アルミ蒸着フィルムによる一文字整枝イチジク樹の被覆法

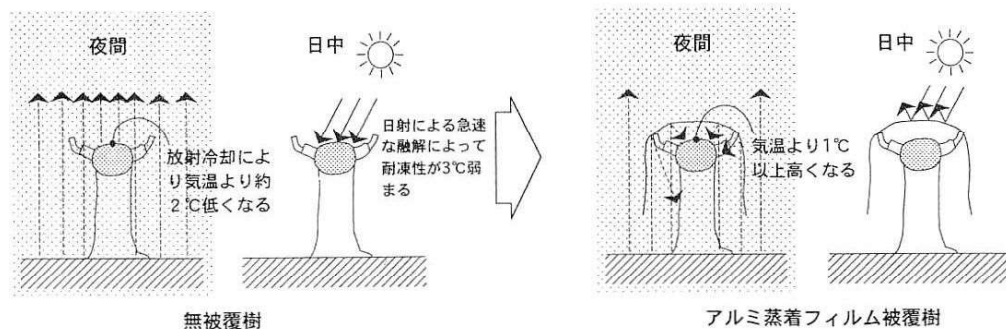


図2 アルミ蒸着フィルムによる凍害防止のメカニズム